異界としての温泉地づくり

5

東京大学大学院農学生命科学研究科　教授
下村　彰男

各地の温泉地において、まちの空間整備や景観づくりに関するさまざまな取り組みがなされるようになってきた。

来訪者が寛(くつろ)いで温泉街を歩けるまちづくりや、野趣に富んだ温泉地の雰囲気づくり、歴史的な施設や景観を保全・活用したまちづくりなどなど、温泉地においても街の風景や景観に配慮し屋外での滞在環境を整えるまちづくりの重要性が理解されるようになってきたと考えられる。

温泉地整備の諸相

こうした温泉地の整備や計画に際しては、「景観」「空間」「風景」といった言葉が使用されている。

これらの言葉や表現は少しずつニュアンスが異なるが、必ずしも意識的に使い分けられているわけではない。また、これらの言葉は基本的に視覚を通した身の回りの環境に対する認知、認識を示すものであり、明確に分離することは難しい。

ここでは、これらの言葉の定義や厳密な概念的枠組みについて述べるつもりはないが、各言葉のニュアンスの差異に象徴される温泉地整備の異なる側面（諸相）について認識しておくことは重要であると考えている。そこで、あえてニュアンスの差異を強調して書き分けると**表1**のような整理となる。

温泉地整備に際しては、これらの諸相を総合的に計画・整備することが重要である。

表1　温泉地整備に関わる言葉の概念（差異を強調）

景観	実体としての視覚像に焦点を当てた概念で、構成要素の操作を通して来訪者の行動や印象をデザインし、快適な滞在体験を提供しようとする際に用いられる。
風景	生活文化的側面が強く、視覚像だけでなくその背景にある地域の自然・社会環境の特質や、歴史、生業などをも一体的に包含した概念として用いられる。
空間	三次元的（空間）イメージの側面が強く、温泉地全体を俯瞰(ふかん)的に捉える上で有効な概念である。

（筆者作成）

しかしながら、現状では「景観」的側面に関しては理解が進んできているものの、「風景」「空間」の側面に関しては、その意義や重要性が必ずしも十分に認識されているとは言い難い。そのため快適で整った景観整備は進められているが、「遊楽空間（遊んだり楽しんだりする場）」に求められる「異界性」の演出が十分でないと考えている。

異界性の演出の効用

後述するように、三廻(まわ)り（三週間）の滞在が一般的であった近世の温泉地は、こうした異界が形成されていたと考えられる。また、近世の遊郭や芝居街、そし現代においても優れたテーマパークやリゾートなどの遊楽空間は、それぞれに性格は異なるものの基本的に強い「異界性」を有している。

来訪者に寛いだ長期滞在を促すためには、日常を忘れさせるとともに、その滞在が快適で楽しいものであることを期待させることが必要である。温泉地もまた「快適で楽しく過ごせる異界」を印象づけることが

重要であると考えている（図1）。

以下に、快適で楽しく過ごせる異界としての温泉地整備に向けて、景観、空間、風景の各側面のポイントに触れておきたい。

温泉街の「景観」づくり

温泉街における景観整備の具体的な方策としては、電柱や看板など煩雑な要素の整理、緑地や水辺環境の保全と活用、安全で快適な歩行環境整備、地域のシンボルや眺望景観の演出、旅館や商店のファサードの修景など、温泉街を構成する景観要素の修景や、要素相互の関係調整が要点となっている。

自然と一体化した清潔で整った景観の中で、街に歓迎されて快適な滞在を期待させる景観デザインは広く受け入れられるようになってきた。

そこで本稿では、少し違った側面「楽しさの演出」という観点から景観づくりを補完しておきたい。

快適な滞在であるとともに、「楽しい」滞在を期待させることも遊楽空間の景観整備にとっては重要である。

その際のポイントは「人」であろう。温泉街において「人」も重要な景観要素の一つであり、来訪客が楽しそうに滞在している姿を見せることも重要な演出である。人々がそぞろ歩き、店をのぞいたり、軽飲食を楽しみながら歓談している様子が見られ、適度な賑わいの雰囲気が感じられる演出が求められる。

街に人の賑わいがあるということは、街と個々の宿や商店とが相互に支え合いながら共存している証しに他ならない。来訪客はそこに豊かな地域社会を見いだし、楽しみつつ寛ぐ。浴客が街に出ることを促し、宿や商店と街との結びつきを見せるとともに、歩行速度と視線交錯に変化をつける景観デザインが重要である。

人が通りに出たくなる仕掛け

通り（街）の賑わいにとって、人が一定の速度で通過し単なる通路となってしまうことは避けねばならない。移動だけでなく滞留を促し、人の動きに緩急をつけることが重要である。

これは道路のデザインだけで実現できるものではなく、隣接する宿や商店が歩いている人の足を止め、欲を言えば前面にスペースを設けるなど滞留させる仕掛けが重要である。建物と通りとの一体化に留意し、両者の間で人が自由に流動し、視線が交錯するデザインが重要である。

古い時代の旅館は構造上街に開いており、宿からも人の気配や視線が通りに滲み出し、相互にやりとりがあった（図2）。建物が近代化する過程で、宿と通りとの関係が希薄になっており、景観デザインを通して回復させる努力が必要である。

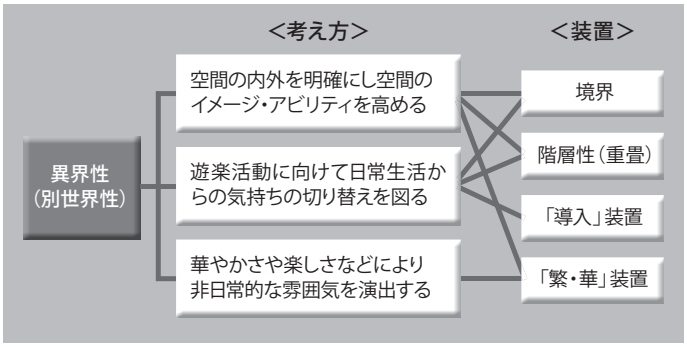
伝統に学ぶ「空間」構造

全国の温泉地に残されている温泉地絵図には当時の温泉地の姿が描かれているが、明治期ごろまでの温泉地の様子には多くの共通点があることが分かる。

一つは旅館や商店などの建築物、共同湯、社寺、そして周辺の山々や河川等、描かれる要素はどこも同じようなものであった。

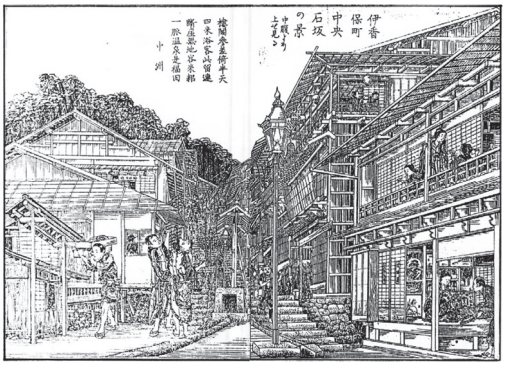
そして二つ目は、これらの要素は

図1 異界性演出の考え方と装置



（筆者作成）

図2 明治期の伊香保石段街



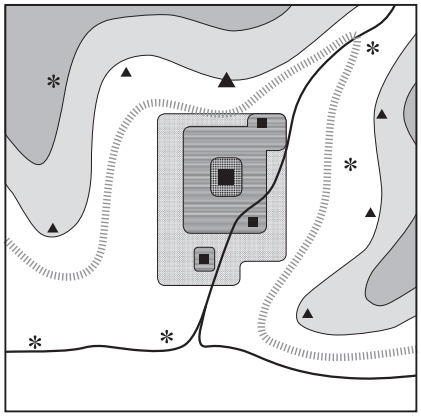
出典：大槻文彦『伊香保志（上巻）』1882年

バラバラに立地しているわけではなく、全体的にある種の秩序が見られる点である（**図3**）。こうした秩序は、温泉地に暮らす、あるいは訪れる多くの人々の活動の歴史的集積によって、結果的に生まれたものであるが、温泉地の空間イメージに鮮明さ（イメージ・アビリティ）をもたらしている。

空間が鮮明にイメージされることで、人はその温泉地の中に居ることを強く意識するとともに、異界（別世界）である温泉地にも居場所を見つけ寛ぐことができるようになる。これは「空間に定位（：オリエンテーション）する」と言われる行為である。

広い砂漠や荒野に一人で放り出された際の不安をイメージすると分かるように、人は自身を空間の中に定位することによって気持ちが安定して、寛ぐこともできるようになる。

図3 温泉地における空間構成モデル



■ 総湯（惣湯、大湯）　■ 他の共同湯
▲ 中心的社寺　▲ その他社寺
有力な湯宿や商店　その他の宿や商店
＊ 自然レクリエーション資源　広小路（広場）

出典：下村彰男（1992）『わが国における温泉地の空間構成に関する研究』

寛げる温泉地の空間的秩序

そして、かつての伝統的な温泉地の様子からは、空間をより鮮明にイメージづけるための考え方を読み取ることができる。具体的な方策は各温泉地によって異なっているが、大きくは、

①温泉地の境界が意識されること
②中心となるシンボルやエリアが意識されること
③空間の方向性が意識されること

に整理される。

先述した旅館や社寺、外湯、そして河川や山などの要素が、相互の位置関係に領域性、中心性、方向性を意識させる明瞭な秩序を有しているのである。

現在の温泉地からは、こうした空間秩序を感じ取ることが難しくなっている。これは特に、戦後、温泉地が近代化そして需要増に応じて拡張する過程で、空間形態面での秩序が徐々に失われていったからである（**図4**）。

この回復は温泉地をより優れた癒やしの場とするために必要な課題である。ただ、社会状況が大きく変わっており、空間構造に影響を与える要素も変化しているし、空間規模も大きくなっており、容易ではない。

しかし一方で建設技術が進展し、素材の可能性も広がっており、計画・設計の自由度は高まっている。現代における主要な景観要素等を活用して空間構造の充実を図るとともに、周辺の山々が見えるなど空間構造を認識するうえで有効な視点や、温泉地の空間構造を全体的に俯瞰（ふかん）できる視点に誘導するなど、来訪者に温泉地の空間構造をより明瞭に把握できるように整備を進めていく必要がある。

図4 構造化の仕組みの変遷傾向

漸変期　進展期

変遷傾向と要因	時期区分	明20 構造形成期	大15 保養地化期	昭20 広域連携期	昭50 観光地化期	復興期
要素複合の弱化	宿泊施設の外部立地化			漸変	進展	進展
	街並要素の宿泊施設への内部化				進展	進展
中心核形成の弱化	外湯の衰退			漸変	進展	漸変
	引湯、自家ボーリングの進展		漸変	漸変	進展	進展
境界明示の弱化	社寺の影響力の低下			漸変	進展	進展
	交通機関の発達による外延化		漸変	進展	進展	進展
	観光活動の外部化			進展	進展	漸変
	境界域の流動化		漸変	漸変	進展	進展
要所布石の弱化	外湯の衰退			漸変	進展	漸変
	集落部のスプロール			漸変	進展	進展
方向性の弱化	中心社寺の影響力の低下				漸変	漸変
	周辺骨格自然の不可視化				進展	進展
	外部資本の流入			漸変	進展	進展
奥行の弱化	車への対応				進展	進展
	街並要素の宿泊施設への内部化				進展	進展

出典：下村彰男（1992）『わが国における温泉地の空間構成に関する研究』

温泉地の個性的な「風景」

二〇〇三年（平成十五年）の「美しい国づくり政策大綱」や二〇〇四年（平成十六年）の「景観法」において、「地域の個性」の重要性が明示されて以来、地域個性に対する関心が高まっている。

温泉地においても、より強く異界を印象づけるうえで各地の温泉地がそれぞれの温泉らしさを有して差別化されることが重要である。ガイドラインとして整理されるような共通解、一般解だけでは、どの温泉地も似たような風景が生まれてしまう。

しかしながら地域個性がどのようなもので、どのように扱うとよいのかについては、まだまだ手探りの状態であることは否めない。比較的分かりやすいのは、「由布院の由布岳」や、「修善寺の独鈷（とっこ）の湯（ゆ）」のように、山や外湯、社寺など地域を象徴する景観要素が各所から見られたり、強く意識されるケースである。その他、草津の湯畑のように中心が明確な場合や伊香保の石段街のように軸線が明確な温泉地など、空間構造に特徴があるケースもある。

地域の生活文化が生み出す個性的風景

ただ、個性的な風景とはこのように分かりやすいものだけでなく、何気（なにげ）なく目にしている風景からも個性を読み取ることができる。

例えば、城崎や玉造、銀山など川幅の狭い河川沿いの両側に立地する温泉地では多くの橋が存在し、祭時などでは河川と一体化して広場のような使われ方をする。この橋の密度や形態は川幅や周辺地形、旅館や商店との位置関係によって異なっており地域ならではの特徴を表しているし、城崎の特徴的な石造の太鼓橋は水害の記憶とも結びついており地域の歴史を語る材料となる（写真1）。

このように身の回りの何気ない風景の中には、地域における自然の特質や人々の生活様式との関わり、そして地域の歴史や文化などが刻み込まれている。こうした地域の物語と一体化した風景は、温泉地をより強く印象づける。

写真1　河川に架かる橋の状況には温泉地ごとに特徴がある。上：銀山温泉（1990年）下：城崎温泉（1987年）（筆者撮影）

地域の生活文化や歴史と密接に結びついた個性的な風景こそが、温泉地整備やまちづくりの重要な資源となり得る。温泉地に暮らす人々が、自らのまちを再認識・再評価する手掛かりや拠（よ）り所（どころ）になるとともに、来訪者にとっても非常に魅力的な観光資源となる。ガイドや紹介文を上手に活用し、地域の物語を伝えながら風景を見せていく計画が必要である。

居心地のよい異界＝温泉地

「観光まちづくり」の言葉や概念は徐々に定着してきており、観光地としての温泉地整備にも新たな考え方での取り組みが求められるようになってきた。

住民、観光客の両者を視野に入れ、温泉地の自然や歴史、生活文化を象徴する資源を保全・活用し、交流型・自立型のまちづくりを進めていく必要がある。

述べてきたように、総合的に整備を進め、快適で楽しく滞在できる異界を目指して温泉地づくりを進めることが重要であると考えている。

（しもむら　あきお）

［参考文献］

- 下村彰男他『近世における遊楽空間の装置性に関する考察』（造園雑誌 55(5)：307-312, 一九九二）
- 下村彰男『わが国における温泉地の空間構成に関する考察』（ランドスケープ研究 60（4）：341-348, 一九九七）
- 下村彰男「高齢社会における都市デザイン」『進化する老い、進化する社会（分担執筆）』（アグネ承風社、145-174, 二〇〇〇）
- 下村彰男『温泉地とディズニーランド』（『温泉』第77巻7・8月号（通巻831号）、20-21, 二〇〇九）
- 下村彰男『土地の記憶としての風景（ランドスケープ）』（LANDSCAPE DESIGN No.73 86-89, 二〇一〇）

下村彰男（しもむら　あきお）

一九五五年兵庫県生まれ。東京大学農学部林学科卒。（株）ラック計画研究所を経て、現在、東京大学大学院農学生命科学研究科教授（森林風致計画学研究室）。専門は、造園学、風景計画、観光計画、エコツーリズム。各地域の文化的景観の保全管理方策などについて研究。共著に『人と森の環境学』『ランドスケープのしごと』『都市美』『フォレストスケープ』『森林風景計画学』など。